

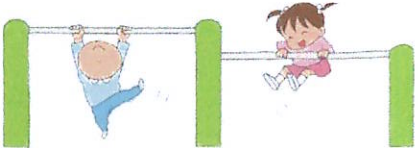


さゆりっ子

「自発的な活動としての」遊び

ある幼稚園の実践です。

「鉄棒カード」に自分でできた技を書き込んでいくユウタ。
「ちきゅうまわり」「まえまわり」をしばらくやったあと
「先生、ここに自分で考えた技を書いてもいい？」
先生は「もちろんいいよ!」と答える。
鉄棒で寝返り始めると「これは、らいおんねむり!」
そして「なまけものがはっぱをたべている」という技も考える。
翌朝も新しい技を考えだしていくユウタ。
鉄棒の上を走る「ランニングマン」
鉄棒に足をかけて飛び越す「ピューマが立つ」を披露した時には先生が
「このピューマが立つを両足ですると「鉄棒立ち」という技になるんだよ。」と紹介してくれた。



もともと鉄棒が好きでなかったユウタが自分なりの鉄棒の楽しみ方を見つけていく。大好きな「動物」をテーマに新たな技を開発し、その姿に先生も寄り添い、ユウタに自信を持たせ、次への意欲へとつながっていく様子が伝わってきます。

この実践を一読した時は「こんな技、あるの?」と、知っている鉄棒の技、こうもり、前回り…を次々と思い出していました。「技を習得していく」ことに鉄棒を学ぶ価値があると思っていた私には、ユウタの姿から「学び」は見えてきませんでした。と同時に「技ができる、できない」からは「楽しい」にはつながりにくいとも思いました。

鉄棒遊びのねらいは、その子なりの鉄棒とのかかわりから、鉄棒を楽しむことにあります。ユウタの発想力豊かなところが鉄棒遊びとマッチしていきます。「鉄棒カード」を含めて子どもの自発的な活動を大切にしていこうとする視点から鉄棒遊びの環境がつくられてきています。

ユウタは前回りができません。でもそのことを言及するような子はだれもいません。それ以上に自分の好きな部分で、友だちと楽しむことができる集団ができています。このことも大事な環境づくりにもなります。



本園の「音楽遊び」の実践です。

最初のころは、指導の途中で「疲れた。」と難しいと感じた時には一休みが必要だったMさん。この頃は「せんせい、いっしょにやっぺ。」と保育士に声をかけ、最後までやり通す姿がありました。

1フレーズごとのゴールをクリアできると、学年キャラクターのイラストがみんなでもらえることに達成感を感じながら、自分から保育士に声を掛けて頑張ろうとする姿に成長を感じます。

Mさんなりに鍵盤ハーモニカを演奏する楽しさを見つけ、みんなで音を合わせることにうれしさを感じている素敵な音楽遊びの環境ができています。

「第1回鈴の音会」が開かれました。

- ・家ではできないこと、急いでとつい言うてしまうことも、園ではのびのびやらせてもらっている。おかげで、自分でという気持ちが育ってきている。
- ・2人の子どもともに新任の先生に縁がある。最初は心配であったが、丁寧に接してくれるので良かったなあとと思う。先生も初めは緊張感があったが、最近をよくお話もしてくれるので安心している。
- ・バス乗務で担任の先生がいなくなることが心配だったが、今年は先生方がいないということがなくて良かった。
- ・宿泊保育の記憶は今でも残っている。夜起きた時に先生が傍に来てくれたことを覚えている。自信につながった経験をした。是非復活してほしいが、先生方の負担も考えると、とも思う。

毎回この時間のお話をとても楽しみにしています。入園希望につながるような魅力ある園づくりをこれからも続けていきたいと思えます。

話し合い（7/11）

お楽しみ保育のさゆりまつりで「おかしやさん」を楽しませてもらった。お店では3つのクイズのうち、みんなでどれか1問を解くとおかしをもらえるようになっている。

ルールをその場で聞いた子どもたちはいろいろな反応を示してくれた。

「どの問題にしますか？みんなで決めてください。」

反応の早い子は「1番がいい。」と自分の意見をさつと言ってくる。別の子が「2番がいい。」と言った時点で一瞬、間ができる。「え～、どうしよう？」と他の子たちも一緒に考え始めたようである。

そこで「どれか1つに決めるんだよ。」と投げかけると、

もう一度「1番がいい。」「2番がいい。」と声上がる。それではダメだということを察してきている子どもたちは、

「多数決にする。」「じゃんけん。」と方法を提案し始める。その辺はこれまでの経験が活かされてとてもスムーズに進んでいく。

多数決では「1番がいい人？…」と3問続けて聞いた後、「2番と3番、同じだったけど。」と更に困った状況になる。「2番がいい。」とつぶやく子が出てくる。

ジャンケンでは最後まで勝ち残った人が、「3番にしたい。」と言うと、すかさず「でもやっぱり2番がいい。」と他の子が言うてくることで再び困ってしまった。

そこからが真骨頂。

多数決でもジャンケンでも困っていると、

「じゃあ、2番でいいよ。」と一人の子が声を上げると「わたしもいい。」と続々と続く。

「え～、ちょっと待ってよ。そこで妥協していいの？」と言う間もなく、グループの意見がまとまってくる。

もともと主張を譲りたくないほどの執着心がなかったのか、早くクイズに挑戦したいからなのか、さっさと問題を解決してってしまう子どもたちの機転の良さには驚かされた。これも「遊びは学び」。

